



株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ, 附タリ, 松波, 青木兩博士ノ起源論ニ就テ(2)

福田, 徳三

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 15(6):905-927

(Issue Date)

1913-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052134>



商業學
經濟學

國民經濟雜誌

第十五卷

第六號

(大正二年一月一日發行)

論

說

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、

附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ (其二)

法學博士 福田 德三

(七)

上田教授ハ株式會社ノ要點三箇ヲ數ヘテ、株式制度、重役制度、有限責任制度ナリトシ、其重要ノ度合ハ株式制度ヲ第一トシ、重役制度之ニ續クトシ、有限責任制度ハ三者中最モ輕キモノナリト論ゼリ。此ノ比較輕重論ハ予ヲ以テ見レバ玉石混淆ニシテ正鵠ヲ得ザルモノハ如シ。即チ有限責任制度ノ要點タル所以ハ形式上又々法律上ニ存スルモノニシテ之ヲ他ノ經濟上實質上ノ要件ト同一視スルハ出立點ニ

第十五卷

(九〇五)

論說

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、
附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ

第六號

一

於テ、既ニ正鵠ヲ失セリ。法律上ヨリ見レバ有限責任ノ一事最重要ナルコトハ前段ノ拙考之ヲ明カニシ得タリト信ズ。而シテ經濟上ヨリ見レバ有限責任ノ制度ハ之ヲ要件ト稱ス可キモノニアラズ全然問題外タルモノナリ。次ニ株式制度ト重役制度ト同一列ニ置クコト亦タ妥當ナラズ。教授ガ一ヲ重シトシ他ヲ聊カ輕ク見ント欲スルハ元ヨリ當然ナリ。然レドモ株式制度ト重役制度トヲ比較輕重セントスルコト其事予ニ於テ惑ナキ能ハズ。重役制度ナルモノハ畢竟スルニ株式會社ノ機關ノ謂ニシテ株主總會ニ顯ハル、株主及ビ監督役制度ト共ニ現在ノ株式會社即チ予ノ所謂蘭佛混合式株式會社ニ於ケル三機關タルモノニシテ、若シ比較輕重ノ論ヲ試ミント欲セバ此三箇ノ機關ニ就テ之ヲ下ス可ク、其一ヲ選出シ來リ之ヲ株式制度ト角逐セシメントスルハ、理路ニ於テハ混淆ヲ來シ判定ニ於テハ標的ヲ外ルモノトセザル可ラズ。換言スレバ要件論ト機關論ト錯綜シ其何レヲモ明瞭ナラシムル能ハザルモノナリ。教授モ又タ機關ナル語ヲ用ヒ『法律上カライヘバ會社成立ノ後ニ其機關ト成テ働クモノハ第一ニ株主總會第二ニ重役トイフ順序デアルケレドモ普通ノ場合ニハ株主總會ハ無力ナモノデアツテ會社ノ重心ハ常ニ重役

ニアル」頁一〇ト云ヘリ。即チ機關ノ比較輕重論トシテ重役ヲ最重要ノ機關トスル所以ヲ論ズルモノニシテ此事予ニ於テモ元ヨリ同説タリ。三種ノ機關中重役ノミ獨リ其實アリ株主——總會ニ顯ハル、——竝ニ監督役ノ二機關ノ殆ンド其用ヲ爲サハルコトハ誠ニ今日ノ株式會社ニ於テ難問題タルモノニシテ、一方ニ株主總會ノ實效ヲ擧ケザル可カラズト主張スルモノアリ、他方ニ監查役制度ヲ改良シマタ公許會計士ノ制度ヲ普及ナラシム可シ云々ノ政策論ノ喧シキ所以ナリ。上田教授ハ嘗テ此種問題ニ就テ甚ダ有益懇切ナル意見ヲ本誌上ニ公ケニセラレタレバ、予ハ不得意ナル政策論ヲ以テ茲ニ蛇足ヲ添ユルコトヲ試ミザル可シ。唯ダ此問題ヲ單ニ目前ノ政策的立場ヨリノミ考定セントスルノ非ナル一事ヲ明言セント欲スルノミ。民主的ナル佛國式株式會社ハ株主總會ヲ以テ中心ノ機關ト認ムルコト恰モ立憲政治ニ於ケル議會ノ如クス。然ルニ株式會社發達ノ實際ニ於テ此機關ハ漸ク其用ヲ爲サハルニ至リ更ラニ專制式官僚式即チレーマン先生ノ所謂 Verbandtypus ノ和蘭式會社ヨリ其最高機關タル監查役ノ制度ヲ取り來リ兩者ヲ混淆シテ重役ト三者鼎立ノ姿ヲ作り出シタルモノ即チ今日ノ株式會社ナリ。混淆ハ飽迄混淆ニシ

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、
附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ、

テ其運用必ズシモ満足ナルヲ得ズ。是レ今日ノ問題ノ自ラ生ジ來ラザルヲ得ザル根本ノ理由ナリ。企業職分ノ分割ヲ唱フル上田教授モリーフマン氏モ必竟ハ此事情ノ一端ヲ見テ構思シタルモノナル可シト雖モ、單ニ株主ト稱スルモ大株主アリ小株主アリテ其利害關係ヲ異ニシ單ニ重役タルト然ラザルトノ別ノミヲ以テ區別スルヲ得ザルモノアリ。恰モ立憲政治ト稱スルモ其實政黨アリ政黨ニハ領袖アリ陣笠アリ必ズシモ多數政治ノ實アリト云フヲ得ズ、重要ノ案件ハ却ツテ極少數者ノ間ニ妥協セラレ投合セラレツ、アルト異ル所ナキヲ思ハザル可カラズ。

機關ハ活動ニヨリテ生ク、活動セザル機關ハ如何ナル制度ヲ案出シテ之レヲ支フルトモ終ニver kümmernセザル能ハズ。一箇年一回若クハ二回僅々數時間會合スル

株主總會ナルモノガ無實有名ノモノト成リ了スルコトハ毫モ怪ムニ足ラズ。數月數十日ニ涉リテ會合スル立憲國ノ議會ト雖モ必ズシモ常ニ代議ノ任務ヲ盡クシテ遺憾ナキモノニアラザルヲ考ヘ見ヨ。常設ノ政黨ノ代議政體ニ必要不可欠所以ハ他ノ事情ト共ニ又タ此裏ニアリト見テ太過ナシ。若シ眞乎株主ガ株式會社ハ機關タルハ實ヲ擧グ可シトナラバ先ヅ此類例ニ想及シテ根本的ニ其制度ヲ改メザ

ル、可、カ、ラ、ズ、然レドモ其果シテ必要ナリヤ又タ可能ナリヤハ遽カニ之ヲ論定スル
コト能ハズ。具體的ニ各會社ノ實情ニ鑑ミテ精考スルヲ要ス。予ガ今懷キツ、アル
管見ニテハ株式會社機關ノ制定モ運用モ之ヲ總テハ企業總テハ營業ノ種類ヲ通
ジテ劃一的ナラシメザル可カラズトスルコト先ヅ最モ疑問トセザル可カラズ。大
企業アリ小企業アリ活働變遷常ナキ會社アリ一定不易ノ事業ヲ營ム會社アリ。生
產會社アリ銀行アリ農業アリ工業アリ交通業アリ都會ノ會社アリ地方ノ會社ア
リ。總テ此等ヲ劃一的ニ一定ノ型ニ強制シテ其組織ヲ案ズ可シトスルコト法律萬
能ノ立場ヨリハ必要ナランモ經濟上ノ制度トシテ果シテ當ヲ得タリヤ否ヤ。予ハ
此點ヨリ先ヅ考ヘ始メテ而シテ後政策上ノ仔細ノ吟味ニ及ブ可キモノニ非ザル
カラ思フモノナリ。株式會社ノ他ノ機關タル監查役ニ就テモ亦然リ。

予ハ今茲ニ機關論ヲ詳述セント欲シテ此言ヲ爲スニアラズ。上田教授ガ重役制
度ヲ以テ株式會社ノ三要點ノ一ナリトスル說ニ首肯シ能ハザル理由ヲ陳ゼンガ
爲ノミ。重役制度ハ今日現在ノ株式會社ノミニ付テ云ヘバ元ヨリ甚ダ重要ナルコ
ト教授ノ言ノ如シ。然レドモ其ハ株式會社其モノ、要點タリト云フコト、同一義

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、
附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ

ニ歸着スルニアラズ。會社ノ機關トシテ重要ナリトスルノミ。議會ナシトモ國ハ國タリ、人若シ國家ノ要件ヲ列舉シテ議會ヲ必ズ其一ニ置カント欲セバ其定義ハ唯ダ立憲國限リ通用ノモノトナリ了ル可キノミ。

乃チ上田教授カ三要點ト稱スルモノ、中最初ニ舉ゲラレタル株式制度ヲ除テハ他ハ之ヲ經濟上ノ要件 *Erfordernisse* ト認ムルヲ得ズ。有限責任ノ制度ハ法律上ノ最根本要件タレドモ經濟上ノ要件ニアラズ。重役制度ハ現時ノ會社ニ就テ最重要ノ機關ニハアレドモ經濟上ノ要件ニアラズ。唯株式制度ノミ經濟上ノ要件ニシテ既ニ說キタル企業者タル會社人格ト相竝ンデ經濟上ニ於ケル株式會社ノ二要件タリ。株式會社ナル名稱ハ最モ好ク此實ヲ示シ、會社ナルコト株式ニヨルコトノ二事即チ株式會社ヲシテ今日ノ株式會社タラシムル所以ナレ。他ノ條件ハ之ヲ『エツセンシアル』ト目ス可キモノニアラザルナリ。

前掲「株式會社ノ形式ト實質」參考

(八)

然リ然リト雖モ教授ガ株式制度ナル名稱ノ下ニ理解セラル、所ハ果シテ當ヲ得タリヤ否ヤ、予ハ當ヲ得ズト認メザルヲ得ズ。教授ハ曰ク『出資ノ證トシテ株式ヲ

發行シ之ヲ賣買讓渡ノ自由ナルモノトシテアルコトハ株式會社ノ最モ著シキ特色デアル^二又曰ク『株式ノ賣買讓渡ノ自由ナルコトハ三點ノ内デ最モ重要ナ點ニ相違ナイ^一』^四ト之ニ依テ見レバ敎授ハ株式制度ナル意ヲ以テ自由ニ賣買讓渡シ得トノ一事ニ限レルガ如シ果シテ然リトスレバコバ未ダ株式制度ノ眞意ヲ充分ニ盡シタルモノニ非ズト云ハザルヲ得ズ元ヨリ現在ニ於テ株式ノ賣買讓渡ノ自由テフ一事ガ甚ダ肝要ナルコトハ誰人モ疑ヲ挾ムヲ得ザル所ナリ然レドモ株式ノ意義ハ此ニ盡キタリヤ否ヤ予ヲ以テ見レバ賣買讓渡ノ自由ハ單ニ一ノ條件タルニ過ギズシテ株式ノ根本的性質ニアラズ之レヨリ派出スル一ノ作用ナリ一ノ結果タルハミ賣買自由ノ事ナクトモ株式ハ株式タルヲ失ハズ否ナ和蘭ニ於テ「アクチ」ノ制ハ起レルハ資本ノ回收ヲ願慮セズ一度出資シタル以上永久ニ失ハレタルモノト看做シ唯ダ之レニ對スル利潤ヲ收メンコトハ一事ニ總テハ望ミヲカクルニヨレリ此點ハレーマン先生ノ『株式法發達史』ニ詳論シアレバ敎授ノ往見ヲ希望スルニ止メテ今ハ細說セズ株式ノ株式タル所以ハ賣買自由ノ一事ニハ全ク存セズシテ自ラ他ニアリ何ゾヤ曰ク其ガDividendenpapierニシテZinspapierニアラザル

コト、即チ是ナリ。上田教授ハ資本ノ動化又タ證券化ニ甚ダ重キヲ說カル、予モ亦同感ナリ。然レドモ株式ノ株式タルハ單ニ證券化ノ一事ニアラズ、證券ノ中殊ニ利潤證券タルコト是レナリ。即チ單ニ Effektivierung ヲ說クコトリフマン氏ノ如クナルヲ以テハ足ラズ。Dividendeneffektivierung; Verbrüchung des Unternehmensgewinns ナルヲ明カナラシメザル可カラザルナリ。予故ニ云ヘリ、リーフマン氏ノ Effektenkapitalismus ナル名稱ヲ取ルトセバ更ラニ之ヲ Zinseffektenkapitalismus ト Dividendeneffektenkapitalismus トニ分別スルヲ要スト。續經濟學研究 然ルニ教授ハ曰ク『公衆ノ放資ハ何時デモ元本ヲ取回スコトノ出來ル形ニ成テ居ラナケレバナラヌ。地所家屋ヤ、公債證書ヤ、銀行ノ定期預金ト同様ニ之ヲ處分シテ現金ニ替ヘ得ルモノデナケレバナラヌ。然ルニ事業ノ資本ハ固定スルモノデアル。事業ハ永久ニ放下サレタ資本ガナケレバ立チ行クコトハ出來ナイ、ソコデ此兩方面ノ必要トスル所ガ衝突シテ居ルカラ、之ヲ調和セシムル爲メニ株式制度ガ起ツテ來タノデアル、即チ企業ニ對スル放資ヲ株券トイフ有價證券ノ形ニ引直スニ依テ其賣買質入ヲ便利ナラシメ固定シタル資本ヲ流動自在ノモノニ變ジタノデアル』五ト此、一節、株式制度、Actieノ、抑、モ、起、レ、ル、由、來、ヲ、說

クモノトシテハ事實ニ合セズ。乞フ暫ラクレーマン先生ニ聽ケ。

Die treibende Kraft liegt vielmehr in der Aktie, wie dies das Volk wohl herausfahle. Hier liegt der Ausgangs punkt der neuen Entwicklung.....

Was ruft in der Aktie diese Wirkung hervor? Der Anteil am Grundkapital, am "jointstock"? Aber diese Eigenschaft war nichts Besonderes. Sie findet sich bei markgenossenschaften im Anteil an Ackerland und Allmende, bei Gewerkschaften im Kux, bei Rhedereien in der Schiffspart wieder, und der Umstand, dass dort das Grandkapital die Mark, das Bergwerk, das schiff bildet, kann einen Unterschied nicht machen, denn auch bei den Handelscompagnien wird die aufgebrachte Summe zum Schiffsankauf verwendet.

會社資本ニ對スル權利ハ決シテ株式會社ノ特色ニ非ズ又タ之レガ株式制度ノ發生ヲ促ガシタルモノニモアラズ。然ラバ株式ノ自由賣買ニ此カ存スルカ、先生答テ、曰ク否。

Die Uebetragbarkeit des Anteils? Richtig ist, dass die Aktie regelmässig übertragbar war, aber die Inhaberaktie tritt erst seit dem Ende des 17. Jahrhunderts auf und bildet auch im 18. Jahrhundert die Ausnahme Vorherrscht die Namensaktie. Es bedarf der Umschreibung auf den Erwerber, und hin und wieder reserviert sich die Gesamtheit und auch bei Kux und Schiffspart begegnet die Uebetragbarkeit.

然ラバ株式制度ヲ喚起シタル根本ノ原因ハ何ゾヤ先生答テ云ク

Vielmehr ist es die Eigenschaft des Dividendenpapiers, aus der alle Wirkungen resultieren. Dividendenanteil und Anteil am Grundkapital sind in der "Aktie" enthalten, aber jener ist das wichtigere, das die Aktie zur Aktie machende.

配當券タル性質、コソ一切ハ株式ノ作用ノ依テ起ル所ナリ、株式ハ配當ニ對スル持分ト資本ニ對スル持分トヲ共ニ含ムハ勿論ナリ。然レドモ其重要ナルハ前者ニシテ之レコソ株式ヲシテ株式タラシムル所以ナレ「マルク」アルメンデ」ノ持分ハ勞働ノ收穫ニ對スル持分タリ、共同ノ冒險ヨリ生ズル「利潤」ニ對スル持分タラズ、是レ株式ト其根本的性質ヲ異ニスル所以ナリ。株式ノ株式タル所以、株式制度ノ抑モ依テ發生セル所以ハ上田教授ノ云フ如ク資本回收ノ自由ヲ得ンガ爲メニアザルコト之ヲ以テ知ル可シ。資本、醸出ハ一時限ナリ、利潤ハ收得ハ連續的ナリ。教授ガレ—マン先生ノ說ヲ破リ得ル實際歷史上ノ事實ヲ以テスルニ非ザル限り、予ハ斷ジテ教授ヲ非トセザル能ハズ。予嘗テ云ヘリ、株式ノ投資ハ女子ヲ出嫁セシムルガ如シ一度出デ、ハ復タ歸ラザルヲ原則トス。又曰ク、株式投資ハ地ニ種ヲ播クガ如シ、

種粃ヲ回收スルコトハ初メヨリ問題タラズ唯ダ其收穫ノ多々益々大ナランコトヲ期待スルノミト。慶應義塾地方講演會ニ於テ元ヨリ今日ニ於テ其投資ハ一ノ會社ヨリ他ノ會社ヘ

又ハ一ノ利潤見込ヨリ他ノ利潤見込ヘ屢々且容易ニ振替ヘラル、コトハ云フマデモナキ所ニシテ予ノ云フハ一會社一株式ヘ永久ニ投下シ去ルノ意ニ非ズ。然レドモ和蘭ニ於テ「アクチー」ノ制ノ起レルトキハ或ハ東印度會社ニ或ハ其他ノ冒險業ニ一度投ジタル元本ハ復タ之ヲ回收セント欲シテ爲セルニ非ズ元本ハ永久ニ之ヲ海外冒險ニ投ジ去リテ而シテ之ニ對シテ莫大ノ配當利潤ノ生ジ來ランコトヲ欲スルガ故ニ利子券以外ニ利潤券タル特性ヲ有スル「アクチー」ガ歡迎セラレタルナリ。而シテ其株式ハアダム、スミス一度唱ヘテ經濟學ノ俗説ガ常ニ之ヲ繰返ヘス如ク恒常的劃一の事業ニ就テ起リシニアラズ却テ危險ノ極メテ大ナル即チ元本ノ全部何時之ヲ喪失スルヤモ計ラレザル大冒險の事業即チ海外通商殖民地貿易及經營ノ事業ニ就テ起リシナリ。否々株式ノ制度株式會社其モノハ海賊ノ目的ノ爲メニ又タ未開國掠奪ノ爲メニ起レリト云フモ過言ニアラザルナリ。スマツト氏ノ privateering ト云フモノ即チ之ナリ。予ハ此點ニ於テ我足利時代ノ對明貿易ニ於

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、
附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ

テ株式類似ノ事實アラザリシカヲ思ヒ之ヲ尋討セント志シテ未ダ果サズ。private-
ingノ如キ危險甚大ナル事業ニ投資スルモノガ元本ノ回收サテハ任意轉換ヲ重
視シタリトハ到底考ヘ得カラザル所ナラズヤ。上田君云フ所ハ今日ノ株式市場
ノ事實ノ一端ヲ捉ヘ之ヲ逆進的ニ推測シテ株式制度ノ起源ヲ說クモノニシテ、史
家最モ警ム可キ誤謬ニ陷レルモノナラズトセンヤ。利子ノ世界ハ循環ノ世界ノミ
利潤ノ世界アリテ始メテ流通ノ活動起ル元本ノ得喪ヲ顧念スルガ如キモノ奚ゾ
近世企業ノ發端タルヲ得ンヤ。唯ダ這箇大魔力ヲ有スル profitwucherei 起リテ近世企
業ハ活動シ其最代表的ナル株式會社ハ起レリ。株式制度ノ而シテ株式會社ノ生命
ノ源泉ハ利潤ナリ。配當ナリ。事前ニ豫定ス可カラズ。其有無多寡ノ極メテ機會的ナ
ル。餘剩ナリ。資本ノ回收サテハ一定ノ利子ノ如キハ生命ヲ喚起ス。力ナキナリ。株
式會社ハ會社タルハ其ガ完全獨立ノ企業者タルコトナリト予ハ言ヘルハ即チ其
ガ唯ダ利潤ニヨリテ起リ利潤ニヨリテ活動スルモノナルガ爲メナリ。上田教授ノ
說ノ如クンバ唯ダ株式會社ノ形式ノ一端ヲ知り得ルノミ。其ガ企業トシテノ玄奧
ノ活力ノ生ズル所以ハ到底之ヲ窺フコトヲ得ザルナリ。

前掲「株式會社」ノ起源
ニ關スル謬見ニ參考

(九)

上來論ズル所極メテ粗雜ナリト雖モ上田教授ト討論ノ要旨ハ卽チ盡キタリ、仍ツテ事ノ序ニ松波、青木兩博士ノ株式會社起源論ニ就テ一言シテ此文ヲ終ラントス。

兩博士ハ共ニ其株式會社法律ノ著書ニ於テ株式會社ノ起源ヲ説ク一節ヲ置カレタレドモ之ヲ熟讀スルニ何レモコザツク氏商法教科書ニ記セル所ト殆ド出入スル所ナキ敘述ヲナスニ止メラレタリ。予ハ不平ナキ能ハズ。何トナレバコザツク氏ハ株式會社ノ歴史ニ就テ何ノ特殊の研究ヲ爲シタル人ナリヤ。通俗ヲ主トスル教科書中ニ僅々數行ヲ掲ゲタル外氏ニ何ノ研究ノ述作アリヤ予ハ淺學ニシテ之ヲ知ラズ。而シテ株式會社史トシテ必ズ見ザル可カラザル特殊研究ノ結果ハ兩博士殆ンド之ヲ顧ミラレザリシガ如シ。予ハ之ヲ遺憾トスルモノナリ。

ツレモ宜シコザツク氏ノ記スル所總テノ若クハ多數ノ經濟史家ガ一致スル所ナランニハ事ノ便宜ノ爲メニ手近ナルコザツクヲ取ルモ敢テ差支ハナカル可シ。如何センコザツク氏ハ說ハ最近經濟史ノ研究ト一致セザルモノナルヲ。コザツク

氏ノ Geschichtliche Entwicklung des Aktienrechts ノ一項ハ第六版此版古ケレドモ新版手元ニナキニ付之ヲ引ク但シ新版大差ナキガ如シ五百五十七頁ヨリ五百五十九頁ノ間ニアリテ、株式會社ハ二箇ノ根 Wurzel ヨリ起
ンリトシ(一) Aus den italienischen statagläubigervereinen (11) Aus den Handelscompagnien, die in
Holland, England, Frankreich Deutschland u. s. f. seit dem 17. Jahrhundert entstanden. ナリトスル
ナリ、青木博士ハ即チ殆ンド直譯のニ

『株式會社ノ發達ヲ探究スルトキハ二箇ノ泉源ヨリ流レ出デタル制度ナルコト
ヲ知ル可シ即チ 第一ハ其源ヲ伊太利ノ國家債權者ノ團體ニ發シタルモノナ
リ……………第二ハ十七世紀以來和蘭及ビ英佛獨其他ノ諸國ニ起リタル商業會社

ニ其源ヲ發セリ』二七〇、
二七一頁

ト記セラル。博士ハ特ニ此節コザツクニ據ルト附言シ大ニ重キヲコザツクニ置カ
ル。予ハ思ヘリ若シ西洋學者ノ或人ハ說ヲ特ニ取ル以上ハ最善ノ *guelle* ノミニ限
ル可ク、第二流若クハ受賣ヲ繼受ス可キニ非ズト。今博士ガ悉クコザツクニノミ據
ルハ之ヲ以テ ausschliessende Autorität ト認メラレタル爲ナリヤ否ヤ。實ヲ云ヘバ
専門家タル以上博士自ラモ株式會社ノ起源ニ就テ研究セラレタル可キ筈ナリ單

ニ、流、布、通、行、ノ、教、科、書、ヲ、譯、出、ス、ル、如、キ、ハ、予、ハ、學、者、ト、シ、テ、ハ、博、士、ノ、爲、ニ、取、ル、可、キ、所、
以、ヲ、見、ル、能、ハ、ザ、ル、ナ、リ。松波博士ハ聊カ異リ各種ノ說ヲ仔細ニ記述セラル。然レド
モ博士モ亦『多數學者ガ株式會社ノ起源トスルモノハ南歐ニ於ケル債權者團モンテス及ビ
北歐ニ於ケル船舶共有團ナリト』云ヒ以下此二項ニ付テ細說セラレ別ニ之ヲ論評
シテ自家ノ見ヲ立テラル、コトナシ。

サテ右ノ青木即コザツク說ト松波即所謂多數學者說トヲ比較スルニ前者(一)
國家債權者團後者ハ(一)債權者團トナスモノニシテ國家ノ添語後者ニ缺ケ前者ハ
(二)ヲ商業會社トシ後者ハ之ヲ船舶共有團トナスノ差異アリト雖モ各項ノ説明ハ
粗々同一趣ニシテ異ル所多カラズ。今先ヅ右兩項ニ下ス用語ノミニ就テ私見ヲ陳
ゼンニ青木博士ガ國家債權者團ニ限ル方當ヲ得船舶共有團トナスヨリハ商業會
社トナス方更ラニ穩當ナルガ如シ。其ハ扱置キ、青木說ノ國家債權團ト云ヒ松波說
ノ單ニ債權者團ト云フハ畢竟ジエノヴァノ『バンク、ヂ、ジヨルジオ』Banco (op. Casa) di
San Giorgio ヲ以テ近世株式會社ノ起源トナス舊說ニ依レルモノナリ。又タ前說ノ
商業會社ト云ヒ、後說ノ船舶共有團ト云フモノハ具體的ニ云ヘバ和蘭ノ東印度會

社及ビ之ニ倣ヒテ起レル Privateering 會社ガ株式會社ノ起源ナリト云フ新說ヲ取
 レルモノナリ。即チ新舊混合ノ折衷說タリ。換言スレバ十五世紀ト十七世紀トヲ打
 テ一丸トナスモノタリ。記憶セヨ此間年ヲ閱スル實ニ二百年ナルナリ。此一事既ニ
 已ニ歷史的考察ノ方法ヨリ見テ精査ヲ要ス、二百年前ニ存在セシ一事ガ何等ノ史
 的發展ヲ經ルコトナク忽然トシテ新タニ起レル他事ト相合シテ茲ニ株式會社ナ
 ル具體的ノ一企業形態ヲ喚起セリト云フ、我等ハ此說ニ對シ先ヅ懷疑ノ態度ヲ執
 ル可ク餘儀ナクセラル、ナリ。

佐野博士嘗テ本誌

十三卷
四號

ニ『加賀藩々政時代ニ於ケル高岡綿場及ビ金澤米場ニ

關スル調査』ナル有益詳細ナル研究ヲ公ケニセラレ、中ニ『高岡ニ於ケル綿ノ相場取
 引ガ特異ノ發達ヲ遂ゲシ理由ノ重ナルモノニアリ、其一ハ古來綿ハ瀬戸内地方ヨ
 リ年々多量ニ越中ニ輸入セラレ高岡輸入商品中最モ重要ナルモノ、一ナリシコ
 ト、其二ハ文政年中加賀藩米ノ相場會所ヲ金澤城下ノ獨占トナセシ結果從來盛ニ
 米相場ヲ行ヒシ高岡市場ノ相場取引ハ綿場ニ集中スルニ至リシコト卽是ナリ』
 ト云ハレタリ然ルニ博士ノ記述ヲ仔細ニ點檢スルニ

(一)高岡綿場ノ創設ハ今ヲ距ル二百四十年即チ寛文十一年ニ在リ……創設以來

明和ニ至ルマデ九十年間舊記ノ徵スベキモノナク其狀況ヲ知ルニ由ナシト

雖モ其間繼續シテ繁盛ヲ致セシヤ疑ヲ容レズ三十頁

(二)文政七年十二月藩命ニヨリ高岡米場指止メラル、ヤ高岡町民ハ藩ニ請フニ

綿場ヲ高岡町ノ獨占市場トセンコトヲ以テセシニ特ニ聽許セラル之ヨリ綿

場ノ賣買大ニ振ヘリ同頁

トアリテ共ニ『高岡沿革誌』ナル書名ヲ添出シテ出典ヲ明カニセラレアリ。寛文十一年ハ西曆千六百七十一年ニシテ明治元年ヲ去ル百九十七年ナリ、然ルニ文政七年ハ西曆ハ千八百二十四年ニシテ明治元年ヲ去ル僅々四十四年ノミ。記セヨ、兩者ノ間實ニ百五十三年ヲ距ツルナリ。然ルヲ高岡綿場ノ特異ノ發達ノ理由ノ重ナルモノニ箇ヲ這箇百五十三年一足飛ニ舉ゲラル。若シ明治以前ハ百五十三年ガ一股ニマタギ得ルモノナラバ文政七年ヨリ今大正二年ニ至ル八十九年ハ如キハ漸ク其半ニ達スルニ過ギザルガ故ニ同ジク之ヲ一股若クハ半股ニ懸ケ得可キ筈ナリ。然ルニ博士ハ曰ク『時勢ノ變遷ハ漸ク内地綿ノ需要ヲ絶チ其定期取引ハ終ニ全ク跡

ヲ歛メタリ』^{三十ト}『明治九年三月ニハ綿市場ヲ開キ定期賣買ヲナシ頗ル盛況ヲ呈

セシ』^同モノガ僅々數年ニシテ『終ニ全ク跡ヲ歛メタル』實例ハ博士自ラ之レヲ吾人

ニ教ヘラル、所ナラズヤ。僅カニ數年ノ間ニシテ既ニ然リ百五十三年ノ永キ年月
ノ間高岡綿場ガ何ノ變遷消長ヲ經ルコトナク百五十三年前ノ一事ト後ノ一事ト
ガ二箇ノ理由ノ其々ノ一トシテ併ビ擧ゲラルハ、^{コトハ} *historischer Sinn* ヲ打破スル
モ亦甚シカラズヤ。而シテ博士ハ其一代ノ大著述タル『取引所投機取引論』ニ於テハ

高岡市場ニ關スル右ノ主張ハ之ヲ繰返サレザルガ如クナルモ猶ホ次ノ如キ時間
無視ノ筆法ヲ用ラレタリ。曰ク『明和七年加州藩ハ藩藏米及ビ給人米賣拂ノ便ヲ圖

リ……高岡ノ米商等ハ右觸達ヲ理由ナキモノトシテ遵守セズ……金澤ノ米場ハ
爲ニ漸ク衰ヘントスルノ兆候ヲ呈スルニ至リシカバ』^{文政六年……翌七年終ニ許}

可セラレ茲ニ^{金澤米場ノ獨占全ク確立シ市場愈々般盛ヲ致スニ至レリ}』^{一頁}一記

憶セヨ、明和七年ハ西曆千七百七十年ニシテ文政七年ハ千八百二十四年ナルヲ、這
箇五十四年ガ『呈スルニ至リシカバ』ヲ以テ一舉ニ飛越シ得ルモノナラバ、更ラニ第
二ノ『至リシカバ』ヲ以テ大正二年ヲ直ニ文政七年ニ接續セシムルモ亦不當ニアラ

ザルコト、ナル可シ。天。下。此。ニ。勝。ル。簡。便。ナ。ル。歷。史。ア。ラ。ン。ヤ。凡。ソ。歷。史。論。ヲ。試。ム。ル。モ
ノ。ハ。常。ニ。時。間。ノ。觀。念。ヲ。離。ル。可。カ。ラ。ズ。高。岡。沿。革。誌。ト。稱。ス。ル。書。ハ。予。之。ヲ。見。タ。ル。コト
ナ。キ。ガ。故。ニ。其。ノ。如。何。ナ。ル。學。術。的。價。值。ヲ。有。ス。ル。モ。ノ。ナ。ル。ヤ。之。ヲ。知。ル。ヲ。得。ザ。レ。ド。モ
先。ヅ。充。分。ニ。史。的。研。究。ヲ。遂。ゲ。『。聊。カ。我。經。濟。史。研。究。ノ。未。ダ。及。バ。ザ。ル。所。ヲ。補。填。セ。ン。』ト
ス。ル。博。士。ニ。シ。テ。直。チ。ニ。此。ク。ノ。如。キ。時。間。無。視。ノ。一。足。飛。史。論。ヲ。敢。テ。セ。ラ。ル。、。コト。ハ
予。ハ。唯。ダ。驚。愕。ス。ル。ノ。外。ナ。キ。モ。ノ。ナ。リ。

『。バン。コ。ヂ。ザ。ン。ジ。ヨ。ル。ジ。ヨ。』ト。東。印。度。會。社。ト。同。列。ニ。置。キ。テ。之。レ。ヨ。リ。株。式。會。社。ノ
起。源。ヲ。說。カ。ン。ト。ス。ル。ハ。亦。右。ノ。佐。野。博。士。ト。同。一。ノ。筆。法。ニ。シ。テ。高。岡。ヤ。金。澤。ノ。事。ナ。レ
バ。史。料。不。足。ノ。故。ヲ。以。テ。之。ヲ。寬。カ。ニ。視。ル。コト。或。ハ。差。支。ナ。カ。ル。可。ケ。ン。モ。十。五。世。紀。ヨ
リ。十。七。世。紀。ト。云。フ。甚。ダ。多。事。ニ。シ。テ。變。動。ノ。極。メ。テ。大。ナ。リ。シ。西。洋。ニ。就。テ。殊。ニ。史。料。ノ
豐。富。ニ。存。在。ス。ル。ジ。エ。ノ。ヴ。ア。ト。和。蘭。ト。ニ。就。テ。兩。者。ノ。時。間。的。差。違。ヲ。全。然。無。視。ス。ル。株
式。會。社。起。源。論。ニ。對。シ。テ。ハ。予。輩。ハ。甚。シ。キ。懷。疑。ノ。眼。ヲ。以。テ。臨。マ。ザ。ル。可。カ。ラ。ザ。ル。ヲ。感
ズ。ル。モ。ノ。ナ。リ。

松波博士ガ東印度會社以下ノ privateering 會社ヲ單ニ船舶共有團體ト見ラレタ

ルハ甚ダ遺憾ナリ。船舶ノ共有ハ其主要件ニ非ズ、海外ニ冒險的ニ通商スルコトガ
 主要件ナリ、其目的ヲ達スル手段ノ一トシテ船舶共有ノ實アリシノミ然レドモ拙
 文既ニ長キニ失シタレバ大體ニ於テ異議ヲ容レザル海外通商會社ノコトニ就テ
 ハ今ハ論及セズ。唯ダ『バンコ、ヂ、サン、ジョルジョ』ノ事ヲ略記シテ筆ヲ擱クコト、シ
 詳細ハ必要ニ應ジテ更ラニ再論スルニ讓ラン。

前掲拙著「ノ三」株式會
 社研究ノ參考書ニ參考

(十)

ジェノヴァノ「バンコ、ヂ、サン、ジョルジョ」ニ就テハ予ガ株式會社研究中ニ示シタ
 ル如ク特ニ之ヲ研究ノ題目トシタルモノ少カラズ。予モマタ前後八箇月ジェノヴァ
 アニ滞在スル間自ラ多少學ビタルコトアリ。ジェノヴァ埠頭ニ今モ存スル暗黒矮
 小ノ建物「バンコ」ハ予ガ屢々杖ヲ曳キテ訪ヒタル所ナリ。予ハ之ガ株式會社ノ起源
 ナリ近世銀行ノ起源ナリトノ說ヲ聞クコト久シカリシガ故ニ格別ノ興味ヲ以テ
 見聞ヲ勉メタリ。而シテ予ノ得タル結果ハ全然否定的ナリ。シーヴェエキング氏ハ特
 ニジェノヴァノ Archivio civico ニ就テ詳細ノ研究ヲ試ミタル結論トシテ曰ク、

Gewiss ist auch hier, ein Unterschied von der modernen Aktiengesellschaft erkennbar. Die mo-

derne Aktiengesellschaft ist eine Kapitalvereinigung zum Betriebe irgend einer Unternehmung, die Genueser Compere waren Kapitalvereinigungen, die grösstenteils aus Zwangsanleihen oder aus Zwangsweise fundierten Anleihen herrührten. Das Kapital der Aktiengesellschaft ist in Aktien, festgesetzte Beträge, eingeteilt, während der locus der compere nur eine ideelle Einheit war. Der Aktionär hofft auf möglichst hohe Dividende, die Comperten waren in Genna seit 1257 auf einen festen Zins angewiesen.... Während die Organisation der italienischen Comperten für die Entwicklung des Gesellschaftsrechts ohne grössere Bedeutung blieb, wurden die niederländischen Compagnien der Ausgangspunkt der Entwicklung des Aktienrechts. Sieveking, Genuesen Finanzwesen mit besonderer Berücksichtigung der Casa di S. Giorgio. 1898. Bd I. S. 186—188.

ト而シテレーマン先生ノ研究ハ更ラニ多ク否定的ナリ
「株式法發達史論四—二十八頁並ニ「株式會社法論」ヲ見ヨ
 蓋シサン・ジヨルジヨ宮ニ設ケラレタル「バンコ」ヲ以テ株式會社ナリトスル說ハ
 ゴールドシュミット氏最モ有力ニ之ヲ唱フ。否氏ハ更ラニ溯リテ株式會社ノ起源ヲ求メテ

Die genuesische maona (mahona) von Chios und Phokäa (Foglie vecchie und nuove), auch genannt maona der Giustiniani, 1346-1566, ist unzweifelhaft eine Kolonialaktiengesellschaft—universalgeschichte des Handelsrechts, S. 295.

株式會社ニ關スル上田教授ノ論說ヲ讀ミテ、
附タリ、松波、青木兩博士ノ起源論ニ就テ

ト斷言シタルナリ。然レ共氏自ラ記スル如ク二百九十六、七頁脚註一九六氏ノ見タルハ千六百九十八年刊行ノ晩年史料ノ一部分ノミニシテ、其他ノ史料ハ氏ノ時ニアリテハ未ダ毫モ整理シアラズ之ニ付テ研究シタルモノナキナリ。即チ Lobers, *memorie storiche della banca di San Giorgio 1832*. モ亦タ Wisniewski, *Hls Aoire de la banque de S. Georges de Genes 1865*. モ共ニ全史料整理以前ノ研究ニ係ルモノニシテゴ氏ハ此等ノミニ付テ考ヲ立タルナリ。然ルニシーヴエキング氏ハ全史料ヲ悉ク調査シタル第一人ナリ。レーマシ先生モ亦粗々史料整理ノ上ニテ研究シタルモノナリ。此等史料今ハ悉ク整理セラレテ *Archivio civico* ノ第四十二號及第四十三號室ニ在リ。其重要ナルモノハシ氏ノ「カザ、ヅ、サデ、ジヨルジヨ」ノ附録ニ載セタレバ容易ニ之ヲ見ルコトヲ得。予ハ學僚ジエノヴァ大學財政學教授兼商業學校長ナルドクトル、アンエロ、ロンカリ氏ノ好意ニヨリテ之ヲ知レリ。

今一言ヲ以テ管見ノ次第ヲ云ハンニ「バンコ、ヂ、サン、ジヨルジヨ」ハ予ガ曩キニ上田教授ニ對シテ株式會社ノ經濟上ノ二大要件ナリト云ヘルモノ全然之ヲ缺クモノニシテ單ニ形式ノ上ニ於テ「マオナ」ガ株式ニ似タリト云フノミ。而シテ假ニ其ガ

甚ダ多ク株式會社ニ類似シタリトスルモ、其ハ *vereinzelter Fall* タルニ止リ、和蘭ノ株式會社トノ間ニ何等ノ有機的關係ナキモノナルナリ。若シ外形ノ似タルヲ以テ起源ト爲スヲ得バ、羅馬ノ「ソチエタス、ブブリカノルム」コソ起源ト云フ可ケレ。何ゾジエノヴァ、ミラノニ限ルニ及バンヤ。而シテ起源ヲ尋ヌル以上、歷史上ノ事實トシテ何等カノ點ニ於テ「マオナ」ガ「アクチー」ノ制ト關係スルモノナルコトヲ立證スルコトヲ要ス。ゴールドシユミツト氏ハ其立證ヲ爲サザルナリシ「ヴエキンゲ、レーマン」諸氏ノ研究出デザル前ナレバ、ゴールドシユミツトノ權威ニ信賴シテ之ヲ起源ト爲スコト或ハ不可ナラジ。有力ナル反證ノ存スル今日、舉證ノ責ヲ盡サズシテ漫ニ之ヲ起源トス予ハ服スル能ハザルモノナリ。松波、青木兩博士一々史實ニ就テ其反證ヲ示シテ予輩ノ蒙ヲ啓カレンコトヲ予ノ切望シテ措カザル所ナリ。

前掲拙著「株式會社ノ起源」

ニ關スル謬見「竝ニ羅馬ノソチエタス、ブブリカノルム」竝ニ羅馬法ニ於ケル勞働ノ概念參照 (終)